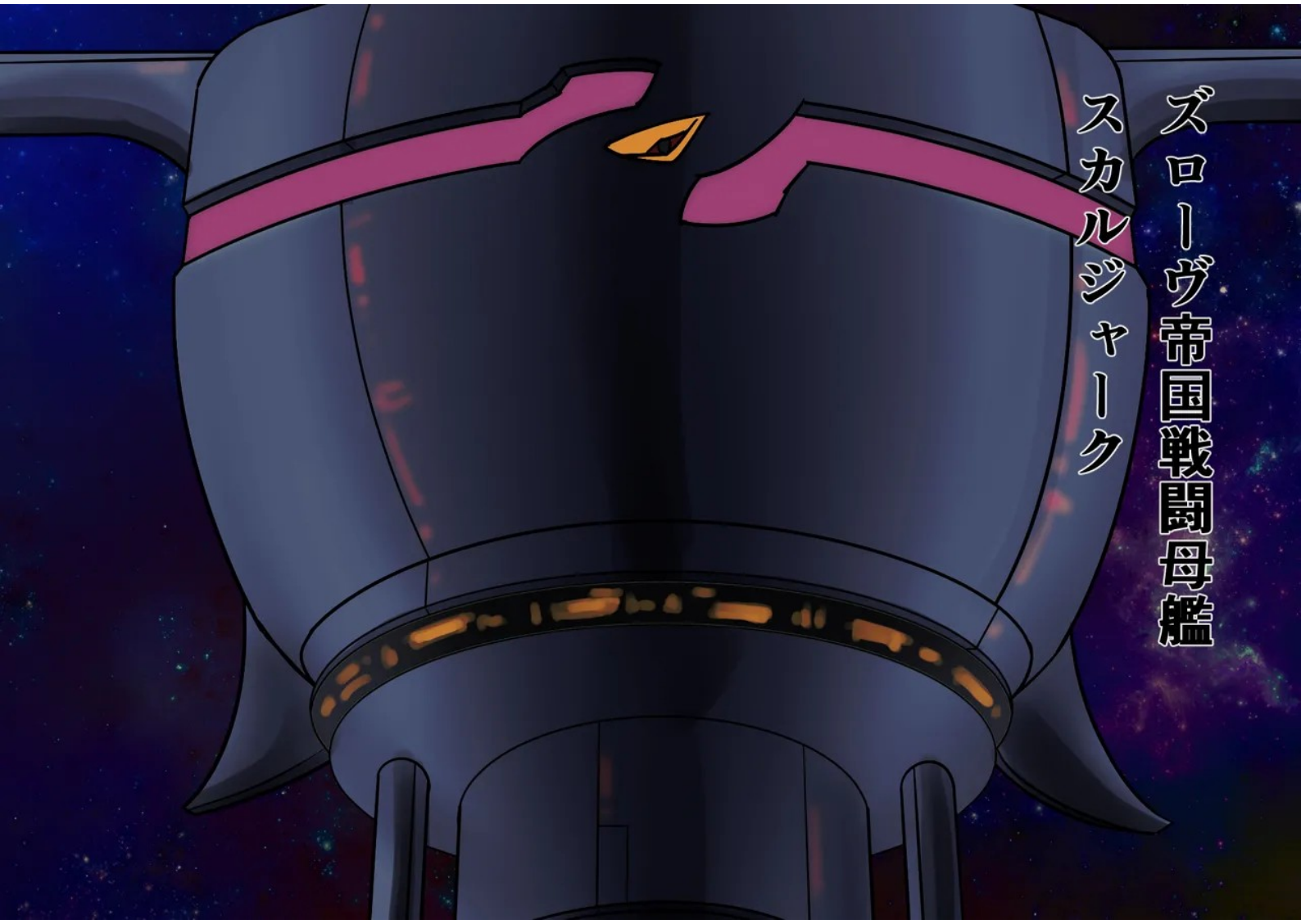
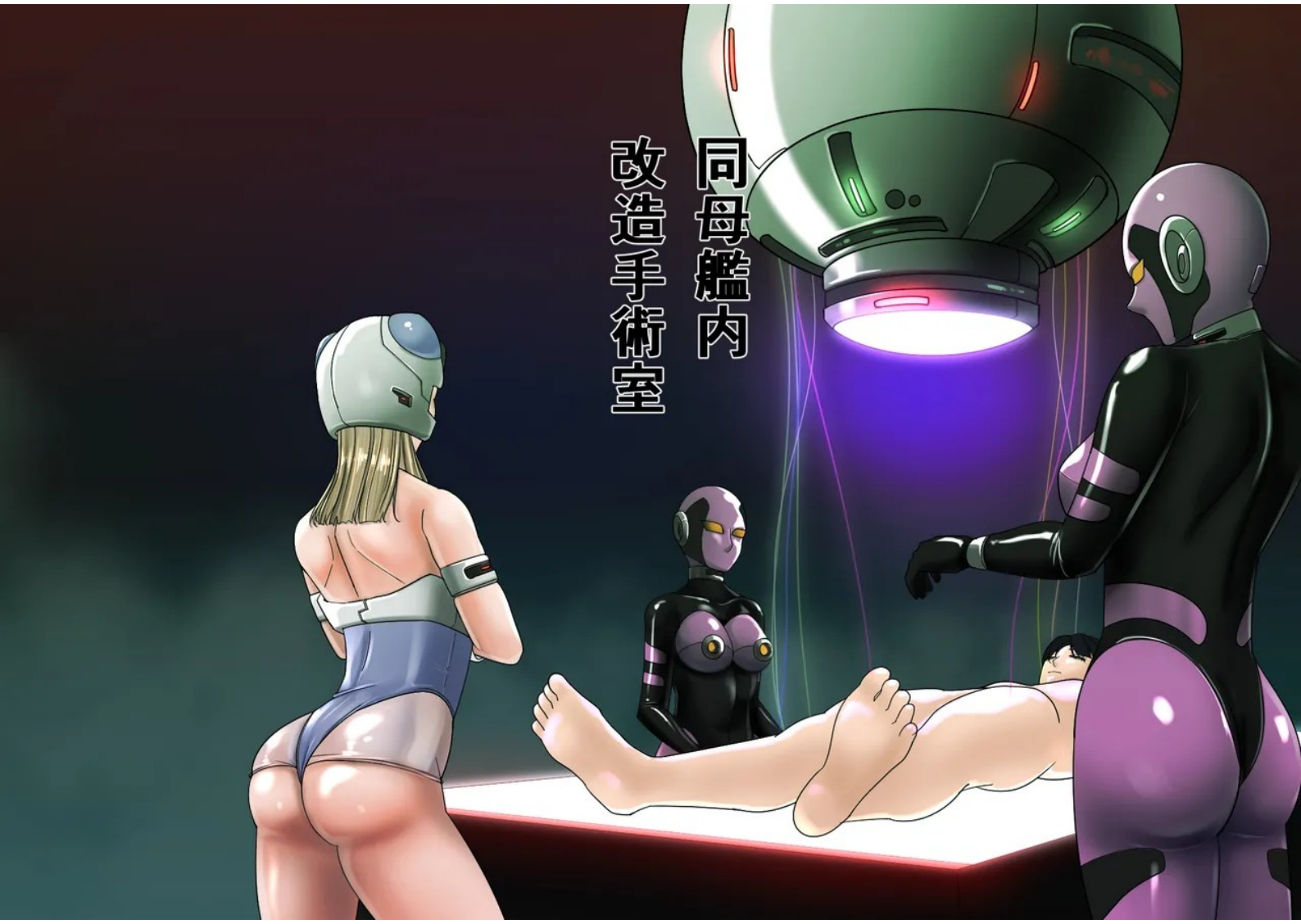
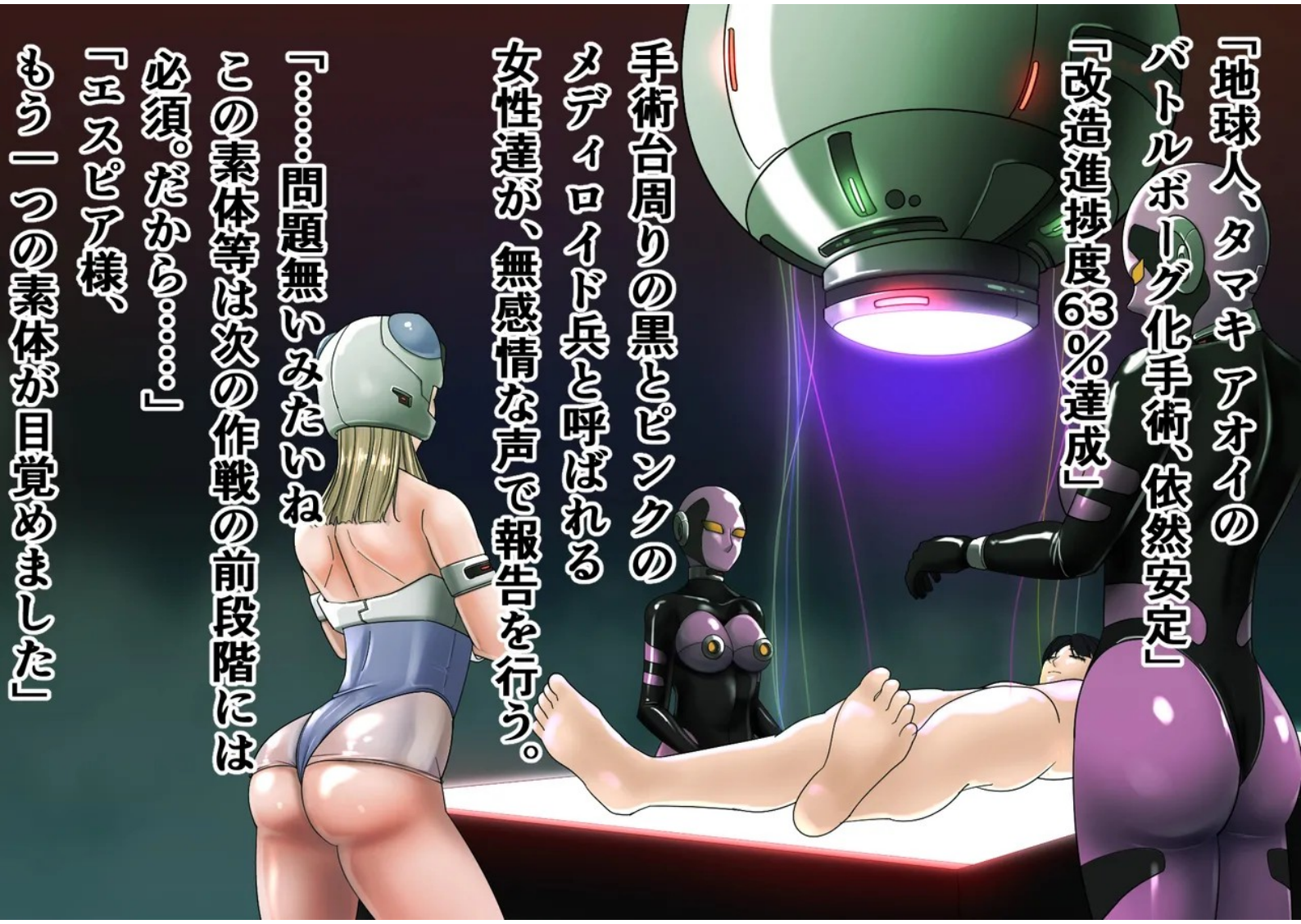
悪ノ女戦士ヘノ変貌


ズローヴ帝国戦闘母艦
スカルジャーク


同母艦内
改造手術室


「地球人、タマキ アオイの
バトルボーグ化手術、依然安定」
「改造進捗度63%達成」
手術台周りの黒とピンクの
メディロイド兵と呼ばれる
女性達が、無感情な声で報告を行う。
「……問題無いみたいね
この素体等は次の作戦の前段階には
必須。だから……」
「エスピア様、
もう一つの素体が目覚めました」

エスピアは呼ばれた方に目を向けると
メディロイド兵に両腕を拘束された
女性が視界に入った。
「ようやく目が覚めたようね
地球人……ヨシノアカネだったわね」
「……アレ？頭が、ぼやけて……
ココはどこなの……私は確か……」
好野赤音はまだ意識が完全に
戻っておらず、ふらふらとした
足取りの中、自分の身に起こった事を
思い出すよう務めた。

「――ごめん青衣！ちょっと
急な用事が出来ちゃって今日の
同好会は休むね」
「うん、絵恋ちゃん
先生には私から伝えておくね」
「ありがとっ！それじゃあ
また明日ね」
絵恋と呼ばれた清々しい雰囲気の
女の子は、友人である
小柄で穏やかな田巻青衣に
そう伝えると、慌てて教室を
飛び出していった。

「あら？今日は田巻さん一人？」
部室として使っている教室に
顧問である女性教師、好野赤音（よしのあかね）が入室し
青衣に問いかけた。
「あっ、好野先生
はい。絵恋ちゃ、城河さんは
急な用事で今日は出られないと」
「そっか、それじゃあ
今日は私と二人で始めましょうか」
「はい、先生」

「――あらあら、もうこんな時間
田巻さん、今日はここまでにしましょうか」
「あっ、わかりました先生」
日が暮れ、
下校の時刻。
二人は片付けを始める。
そこに――

「えっ⁉」
「キャッ！」

「ヒッ⁉」
赤音は記憶を整理し終え意識が戻る。
しかしその目の前の光景は
信じられないモノだった。
首と四肢が切断され、
身体の中が機械へと
置き換わっている
教え子の姿がそこにはあった。

「た、田巻……さん……
田巻さんっ！」
「……せ、せんせ、い……たスけ…テ」
「フフフ、お前たち二人は
我らズローヴ帝国の一員と
なる事が認められたわ」
「ど、どういう事ですか！
こんな……こんな事……」

スカルジャーク内
女王パンデスの間
「――おのれライザス坊や
全く忌々しいっ！」
女王パンデスは
苦虫を噛み潰したような表情で
作戦失敗の報告を聞いていた。

「……エスピア、これだけの失態……
わかっているかしら？」
「申し訳ございません、女王様っ！
で、ですが、今回の作戦、失敗こそしましたが
ライザスの弱点となる存在を発見致しました！」
女スパイ エスピアは女王パンデスに今にも処分を
されそうになるも必死に懇願する。
「……ほう、エスピア申してみよ
そのライザスの弱点とやらを」

「はっ！実は奴らの故郷、ダリス星崩壊の際
死んだと思われていたライザスの妹、
エレンが生きていたのです」
「ほう……」
パンデスの傍で控えていた
大幹部ガルーケン将軍が軽く驚きの声をあげた。
「はっ！そのエレンを捕らえ
もう一人の銀河戦士……ズローヴ帝国のライザスを
生み出します」

「オホホッ、ライザスと云えども
妹には手を出しにくい……そういう事ね？」
「はいっ！」
「しかしどうやってライザスの日をかいくぐり
エレンを捕らえるつもりだ？」
傍で控えているドクターガイツが
疑問を投げかける。

「ドクターガイツ様、そこはご安心を。
エレンが唯一ライザスと離れる、
学校という所がございます。
そこの施設を使い、エレンを捕らえます」
「とは言うが、エレンもライザスとの
連絡手段は持っていよう……そこはどうする？」
「はい。ですのでエレンを捕らえるのは
私や機獣人、バトロイド兵では無く、エレンの周りの
地球人に実行させます」

「地球人はダリス星人同様、愛だの友情だのと
宣っております。その友情とやらを利用して……」
「オホホッ、なるほど。
少々回りくどい作戦ではあるが
任せましたよ……失敗すれば……わかっているわね？」
「ハハッ！必ずや！」

「――そんなっ！田巻さんは
城河さんを捕らえる為の道具として
こんな事にっ!!」
「そう、でも作戦が成功すれば
使い捨てじゃ無いから安心しなさい。
このバトルボーグ化手術で
支配される側から支配する側へと
変わるわ。圧倒的な力と永遠の命を得て
私と共にズローヴ帝国へお仕えする事が
出来る……大変光栄な事よ」

非日常の状態、城河絵恋が別の星の人間であった事、そして目の前の生徒の惨状。
今、好野赤音の頭の中は混乱の極みにいた。
「……イや、で……スえ、レンちゃんにそンな、コトする、ノワタシ……」
「あぁ！田巻さんっ！私もよ！
自分の生徒をこれ以上
貴方達の勝手にはさせません‼」

「アハハハッ！これが友情？
それとも愛ってやつかしら？
……くだらないっ！」
「ズローヴ帝国には……
女王パンデス様にお仕えするモノには
不要の思想よ」

「でも大丈夫よ。この手術が済めば
お前たち二人は私の部下として
身も心もズローヴ帝国に捧げ、
永遠にお仕え出来るようになるわ」
「さぁ、メディロイド兵！
この地球人二人の改造手術を再開せよ！」
「ヒッ！い、イヤァ!!
やめてくださいっ！」

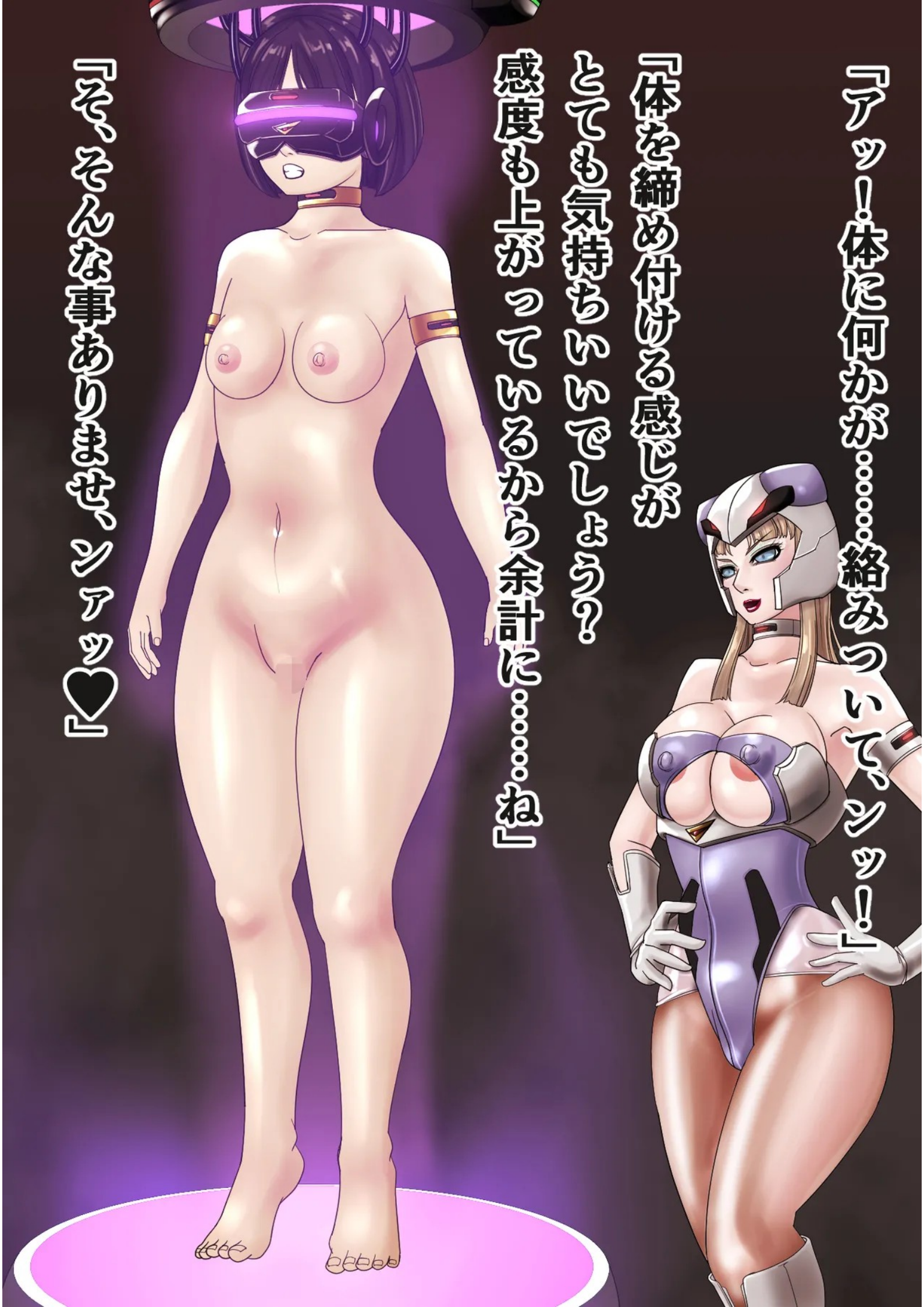
好野赤音のバトルボーグ化手術が開始されて数時間経過。
着々と筋肉、内臓が機械のパーツへと置き換えられていく。
人間から人外のモノへと……
「人工心臓、適応――ヨシノアカネの拒絶反応なし」
「了解、続けて各種神経接続テスト開始」

『――最後は脳の改造。
フフッ、お前たち地球人は文明レベルは低いかわりに
改造適正が高くて少し驚いたわ。
これなら私に迫る優秀なバトルボーグになれるわ』
『止めて下さいっ……もうこれ以上
私を変えないで！』

「ァァ……田巻さん！
そこにいるのね！」
隣から青衣の声が聞こえ、思わず反応する赤音。
「田巻さん。お互い身体を侵されても
心だけは保ち続けていきましょう
負けずに頑張ろ！」
精一杯虚勢を張り、生徒である青衣を励ます。
それは自分に対しても……

「――ッ！はいっ、好野先生！」
「アハハッ、これも麗しい愛と言うのかしら？
ズローヴ帝国の科学力を気の持ちようだけで
耐えられるほど軟じゃないわ」
「……さて、思想改造、悪の衝動性を植え付ける前に
お前たちを帝国に仕えるにふさわしい姿に変えるわ」

「ど、どういう事なの？」
「怯える必要は無いわ
そう、今のお前たちに相応しい
真の姿と言っていいかしら」
「これからスパイ、破壊活動を
する上での姿であり正装よ……
フフッ、メディロイド兵！開始しろっ」


「アッ！体に何かが……絡みついて、ンッ！」
「体を締め付ける感じがとても気持ちいいでしょう？感度も上がっているから余計に……ね」
「そ、そんな事ありません、ンァッ♥」

赤音の足元からショートブーツが形成され
光沢を帯びたタイツが太ももにぴっちりフィットし
快楽を与えながら変化していく。
『んっ、何かが絡みついてくる
ハァハァ、何これぇ♥』

青衣の方にも変化が起こり
レオタード、そしてショートグローブが形作られていく。

「よく似合っているわよ
タマキ アオイ…いや、マジャー」

「アンッ♥……マ、マジャー？
わ、たしは田巻、あ、おいンッ♥」

赤音の年相応、少し垂れ気味の乳房がレオタードで締め付け、ボディアーマーにガードされていく。
「ンハァ、ハァ……だ、ダメぇ♥」
「快楽に順応してくれて嬉しいわリージャ？」
「ンヒィ！」

「さぁ、最後の仕上げよ
脳改造開始っ！」
エスピアが命じた直後、
脳改造装置が駆動し、二人の
思想を書き換えていく

「アァアアアッ!!」
「イヤァアアアアッ!!」
二人は脳がかき回される感覚を
受け、悲鳴を上げる。
それと同時に
ヘッドマウントディスプレイから
今までズローヴ帝国が
数々の星で行ってきた
邪悪と呼ぶに相応しい行為が流れ出した。

「よし、徐々に快楽物質を
増幅させていくわよ」
「こ、こんなおぞましいっ！
決して許されないわ！」
「嫌ぁっ！もう観たくない！
観たくないですっ！」
「フフッ、続けて
残虐行為などを喜んで行うよう
脳を調整する。
どう変貌するのか楽しみだわ」

「アァ、どうして……目の前に私が
でも私じゃない？私が、
笑顔で人を殺そうと、ヒィッ！」
「止めてぇ！私はこんな酷い事
しないっ！目の前の私は
どうしてこんな事が出来るのぉ!!」

「エスピア様、今現在の脳浸食度51％抵抗により、少し遅れが出ています」
「へぇ、中々侮れないものねメディロイド兵
各装置を最大まで上げなさい」
「かしこまりました」

「ンォオオオッ♥♥」
「ンギィイイイッ♥♥」
「わ、私もこの手で殺ってみたい……
いや、ダメ～……駄目？どうしてだめなの？
地球人だから？でも私は地球人じゃない？
わからない……わからない……誰か……」
「イイ感じに頭が出来上がってきたわ
最後に私がお前たちの思想を整えてあげる」

「二人とも聞きなさい
お前たちはもはや地球人では無い
偉大なるズローヴ帝国の幹部」
「……ハイ、私達は……
ズローヴ帝国の幹部……」
「女王パンデス様はお前たちに
強靭なメタルボディと永遠の命を
お与え下さった」
「ありがとう、ございます
女王パンデス……様」

エスピアの声と共に
目にしている映像には
女王パンデスの姿が
まるで神の如く映し出される。
「あぁ……女王様……♥」
「そう、このお方こそ全宇宙を
支配するべき女王、我らの主」
「はい、我らの主。女王パンデス様」
「しかし、我ら帝国の
邪魔をする奴がいるわ」

洗脳が進む中、次に映し出されたのは
銀河戦士ライザスの姿であった
「この男こそ我ら帝国の敵……
どうすればいいのかわかるわね？」
「クッ！ライザスは抹殺するべき
我ら帝国の……敵っ！」
「フフッ、それでこそ
我らスパイ部隊の一員として相応しい」

「「ありがとう、ございます」」
「地球を捨てたお前たち二人を
歓迎するわ。
マジャー、そしてリージャ」

「「シヒィイイイッ♥♥♥」」
新たなる名を呼ばれた瞬間、
脳に激しい衝撃が走り
二人の体がガクガクと痙攣する。
最早二度と元に戻る事がない状態にまで
脳に帝国の思想が焼き付けられた証拠であった。

その後、
二人にはズローヴ帝国の知識、
スパイ技術、戦闘技術、性技などが
ヘッドマウントディスプレイを通し
取得されていった。

『――目が覚めたみたいねマジャー
体のほうは問題無いかしら？』
『……ええ、各部問題無いわエスピア
ご命令があればすぐにでも』

田巻青衣は元の穏やかな性格が消え失せ
ズローヴ帝国の幹部、スパイ部隊マジャーとして
生まれ変わった。
青衣の時には決してしなかった
幼さの中に妖艶な雰囲気を醸し出し
冷酷な笑みを浮かべて――

『リージャはどうかしら？』
『エスピア、私も問題無いわ』

妙齢の、朗らかで落ち着いた雰囲気だった赤音は
一転して禍々しくも妖艶な女幹部、
リージャへと変貌した。
かつての人気女教師の姿からは
想像もつかない佇まいでエスピアの問いに答えた。

「ほう、仕上がったようだなエスピア」
と、そこに大幹部ガルーケン将軍の姿が現れた。
「はっ！適正があり、予測データ以上の仕上がりかと。
それぞれマジャーにリージャと名を与えました」

「ふむ……素晴らしい。スパイ部隊は俺直属の隊となる
頼んだぞマジャー、リージャ」
「はっ!! マジャーと申します
ガルーケン様、なんなりとご命令を!」
「ガルーケン様、お初にお目にかかります
リージャと申します。
私の全てを帝国の為にお使い下さい」

「フッ……エスピアこの二人の性技はどうなっている？」
「はい、知識は二人ともに覚えさせておりましてマジャーは未経験、リージャは地球人の時に行っております」
「そしてガルーケン様のお好み通りに二人にも濃い化粧を施してございます」

「よし、俺が実技での指導を施してやる
エスピア、お前はどうする？」
「申し訳ございませんガルーケン様
ありがたきお言葉ではございますが
作戦の準備を行いたく」
「そうか、わかった任せる
ではマジャー、リージャ、俺についてこい」
『『はっ‼私達のご指導
お願いしますガルーケン様♥』』

「んっ、んっ、んっ、んふー♥」
鼻を鳴らし、覚えたての性技を使って
主人となった男に忠誠心をアピールする。
反対側のリージャは
肛門を愛おしく舌でほぐし、
ベロベロと音を立て舐め上げる。
「ん、れろっ♥美味しっ」

「マジャー、そうだ緩急をつけ
音を立てながらイヤらしく
チンポを弄れ」
「ふぁい♥ガルーケン様♥
んぶっ、んぶっ、ぶぼっ、ぶぼっ」
「ガルーケン様ぁ
リージャは、リージャの
舌はどうですか？」
「くくっ、リージャはもっと
舌をケツ穴にねじ込むように奉仕しろ」
「はいっ♥仰せの通りに♥」

「ングッ！で、出るぞマジャー！
喉の奥まで咥え込め！」
「んんんんっ‼♥♥
ガルーケン様のミルク美味しっ♥」
「んふふっ♥ガルーケン様の精子
すっごく濃い匂いで素敵ですわ♥」

「んはぁあ♥ガルーケン様の精子が
喉に絡みついて、んほぁ♥」
「フッ、マジャーもリージャも
飲み込みが早いじゃないか」
「ありがとうございます
ガルーケン様♥」

「んぁあっ♥ガルーケン様のおちんぽとバイブがお尻とおまんこ両方に！素敵、素敵です♥♥」
「くくっ、リージャ……本当にケツ穴でのちんぽは初めてなのか？本当は地球人の頃からさぞ好き者だったんだろう？」
「ち、違います♥私、本当に後ろは初めてで……んひぃ♥」

「その割には
はしたなく乱れおって！」
「あぁっ！申し訳ございません
32歳にもなってこんなにはしたない女で♥
ガルーケン様、リージャは生涯お仕え致しますので
どうか捨てないで下さい♥」
「くくっ、こんなドスケベは
俺が傍に置いて使ってやらないと、なっ！
わかったらもっとデカケツを使え」
「お、仰せのままにぃ♥♥」

「マジャー、お前もお前で
先ほどまで男を知らん女だったくせにその乱れ様
くくっ、お前も俺に仕えるに相応しい女だ」
「あぁあっ♥ありがとうございます！
マジャーはぁ、ガルーケン様に
全てを捧げる為に生まれてきました♥」
「くくっ、どうだ？地球人だった頃より
幸せだろう？マジャー」

「はいっ、勿論でございます！
下等な地球人であった私を、私達を
拾って下さり、マジャーはぁ♥♥」
「そうだろう、お前は何も知らぬ小娘から
これから変わるのだ。スパイ部隊に相応しい
女へとな」
「はいっ、まだまだ未熟ですが
必ずやガルーケン様好みの女へと
マジャーは変わります♥」

「くくっ、その為にもしっかり
俺が教えてやろう！
ぐっ！出すぞマジャー！」
「んぁあああっ♥
イクイクっ！マジャーもイキます♥
ガルーケン様ぁあ♥♥」

ズローヴ帝国
戦闘母艦スカルジャーク内
廊下をカツコツとヒールの音を響かせて
歩く3人の悪女。
新幹部マジャー、リージャの完成報告の為
女王パンデスが居る間へと歩を進める。

「待っていたわ
この女王パンデスに
新しく仕えるモノよ」

ズローヴ帝国のカーテシー（お辞儀）で
頂点である女王パンデスに挨拶をする。
「女王パンデス様、本日はズローヴ帝国
新幹部マジャー、リージャのご挨拶に参りました」
「二人共、女王パンデス様にご挨拶を」
「「はい」」

「お初にお目にかかります女王様
スパイ部隊、リージャと申します」
「同じくマジャーと申します
私達は元地球人であるにもかかわらず、
この偉大なるズローヴ帝国に幹部として迎えて下さり
感謝の念に堪えません」

「このリージャ、ズローヴ帝国に
永遠の忠誠を誓います」
「このマジャー、ズローヴ帝国に
絶対の忠誠を誓います
そして微力ながら、必ずや銀河戦士を
抹殺し、女王様に地球を献上いたします」

「オホホホホッ！
マジャー、リージャ期待しているわ」
「「ははっ!!」」
「女王様、これで作戦の準備は整いました。
これから3人で地球に降り、
任務遂行致します」

城河絵恋の友人であった田巻青衣と
教師で顧問の好野赤音は
敵対しているズローヴ帝国の手によって
悪の女スパイ、マジャー、リージャへと
身も心も作り変えられてしまった。
銀河戦士ライザス、エレンに
最大の危機が訪れようとしていた。

続く……？